

仏教福祉のあり方を考える—新学科への期待

志田 利

1. はじめに—仏教福祉の目標—

本学で福祉コース新設の動きがはじまりました。

十年來の懸案がようやく実現のはこびとなり、当初から関わってきた身にとりまことに感慨深いものがあります。

本学の建学の精神にかない、世の期待にこたえうる内容にすることが課題であり、全学あげて取り組むべきテーマであります。

私なりに思いを挙げさせていただいて、少しでも参考となるものがあれば幸いと考えるものです。

端的にあげてみますと、

- (1) 仏教を基本とする福祉のあり方を大切にしたい
- (2) 生きている人間の相談相手になりうる僧侶の養成を目指したい
- (3) 無住寺院対策としての福祉サービスのあり方を考えたい
- (4) 仏の心を持った福祉人の養成に努めていきたい

といった目標が考えられるのです。

「社会福祉士及び介護福祉士法」の誕生を機に、福祉学部を設ける4年制大学が全国的ひろがりを見せております。すでに130校を超えると聞きます。本学は、後発の位置にある立場であります。そのなかで特徴のある教育内容がえられなければ、意味がありません。本学らしさとはなにかを真剣に考えることが求められます。長く福祉の領域に身をおいてきた立場からは、先にあげられたようなめあてが、1つの例として考えられるのであります。仏教学部のなかにおかれる福祉コースとはどんなものであるべきかの視点を大事にし、関係者のそれぞれの経験を大事にし、知恵をだしあうことが大切になります。

幸いにして日蓮聖人ゆかりの大自然、そして身延山久遠寺の境内に位置する恵まれた環境にあります。これを利点として受け止め、社会に貢献できる人材の養成をめざすという原点に戻って検討し、実践につなげることであらうと考えるものであります。

2. 本学の特質とは

(1) ヘルパー講座の実績

本学で4年前からホームヘルパー養成の講座を実施してきたことは、福祉コースの基を作る点で大きな役割を果たしている、と申しあげたい。この講座開設にあたってのご苦勞は、多くを

事務局の松木・一之瀬両君の奉仕的な取り組みによっているものです。地元身延町の協力をえられ、開設にこぎつけるまでの難関をのり越える歩みは、両君が大学紀要4号に記しております。

この実績のうえに、

①この講義に参加された講師陣が、福祉コースの柱としてかかわってくださることになったこと、

②講座でお願いした実習依頼先の施設が、また主な実習先としておひきうけいただいたこと、

③地域の方々が、講座を通して本学の存在を評価し、福祉コースの期待への声を高めていただいたこと、

などが成果として挙げられることです。本学がお坊さんの養成だけではない。一般の学生も受ける大学なのだ、と地域の方々に理解していただくための大きなアピールになった、と自負しているところ です。

本学学生も、この講座に関心の的として実際受講する者も毎回数名ずつ希望者があり、最後までがんばり修了証を受領しています。そして、卒業後の進路に講座で学んだ福祉分野を選ぶ者もでてくるのです。この休日中心の時間をかけて関係者の理解と協力をえられて講座を実施しつづけたことが、大学として福祉コースをとりあげることになったときのなによりのよび水としての役割を果たすことになったのは、関係した者としての喜びであります。

このことは、新しい事業をはじめようとする時はなにごとにもその火種となるもの、核となるものを用意されていることが成功の要素であることを教えています。スポーツ選手の栄光のもとには、他人の何倍もの汗と涙をとまなう苦しい演習が必ずあることに似ています。ヘルパー講座の4年間の関係者の汗と奉仕によるとりくみが、新学科としての福祉コースを順調たらしめる基礎づくりの力ともなるものと考えます。

(2) 地の利—久遠寺の環境

なによりの本学の所在する地の利であります。日蓮聖人が9年余にわたり修行にいそまれた、まさに霊地である。このことの利を第一にあげるものです。

私自身、本学にお世話になるまでは一度も足をはこんだことがありません。4年制大学になる前の段階での検討の場に加えていただき、身延線の客となりました。富士川沿いの変化のある風景、身延駅からバスにゆられてのぼる途中の門前町の人々の姿、総門を入ってから寺院の雰囲気、すべてが新鮮でした。特に会議の合間に参拝した久遠寺のおごそかな境内、すばらしい大自然との人智の調和をみるおもいででした。そしてまた大学にお世話になり、宿坊から足をはこび朝勤にはげまれる感動的な学僧達の献身ぶりにふれるとき、ああ良い学びの大なるキャンパスであるなあと、感じさせられたのでした。早朝から本山のおつとめにいそしみ、そ

のあと足を早めて教室に座り眼を輝かして聴講する学生もおられる本学は、なんともすがすがしい空気のなかにあるのです。

僧侶の道に進む者にとってふさわしい環境であるだけでなく、一般社会に出る前に宗教の心を己のものにしたいと進学してくる学生にとっても良い環境です。ネオンかがやき遊びの要素をふんだんに提供される都会に学ぶよりも、どれだけ学業に専念できる場であることか、これは誰にも自明のことでありましょう。

このキャンパスで仏教を学び、そのうえで福祉の心を身につける学業に励むことができる、このことは他の大学にない好条件であります。人間の相手をする役割をになうのが、福祉の仕事です。この人間を育ててきた大自然にふれる、そのなかで人間とはなにかを考える機会がえられる、ということです。大自然を前にした人間の小ささ、そしてどの人間も同じ仏の子であると平等性に気づかされる環境の利点、これこそが本学のなによりの特質であり、自慢できる要素であるとしみじみ考えさせられるのであります。

(3) 豊かな実習の場

福祉実践の場に恵まれていることは、また大切な利点です。久遠寺ゆかりの社会福祉法人が経営する老人福祉施設等が多く所在するというだけでも、本学の福祉を実習し体験する場が豊かに存在することを強調できるのです。さらに、全国的に著名な網脇龍妙師が創設した深敬病院（現在は身体障害者療護施設かじか寮）も所在した地であることです。師は明治9年身延町に生まれ、得度の後らい病患者の救済を発願、身延山法主豊永良上人の賛助をえて病院をつくりらい患者を収容するとともに、各地のらい病院に法華の道場を設立した方です。このように、歴史的にも現代的にも福祉的要素をたくさんに有すること、この地の利を活用して学習できることはまことに有意義なものであります。

愚見ですが、福祉人にとり大事なことは、医療や教育のように人間相手の職域がいろいろあるなかで、特に全人的なお相手をするのがもとめられることです。人間の相手をするのが、空気を吸うごとく自然であることが求められます。

そのためには、カリキュラムに定められた現実の時間分だけ体験勉強として教室に座す時間以外は、常に現場にある位のとりにくみが大事であると考えます。福祉サービスの利用者と日常的にふれあい、そのなかで感じとった問題意識を教室にもちこみそこにおいて、学生仲間と課題を共有し、その解決のために教員の助けもえて、自らを納得の得られるところまで高めていくことです。

この繰り返しを重ねつつ4年間の学びをえられるならば、卒業後に現場から受け入れられ、歓迎される存在になりうるのであります。実践からはじまり実践のなかでみがかれる、この教育環境が用意されているのが本学の特徴の1つといえるのです。すぐ近くに福祉実習の場に恵まれている福祉コースを有する大学、というのがなよりのポイントになりましょう。

(4) 地域の理解と協力

地域社会との連携が豊かなことも、利点としてあげられます。身延駅に降り立ちますと、「信仰の町」としての看板が目に入り飛び込んでまいります。身延山にお参りに見える方々を受け入れ、その人々をお相手する役割がもとになって形成された町であることを示しております。地域の方々が、700年をこえる歳月を久遠寺にたより、久遠寺と共に生活してきた歴史の重みをよく知っておられます。

この信仰心を大事にする町の雰囲気は、また人間同志のふれあい、助けあいの大切さを自然にうけとめる福祉的なものの見方が豊かであることにつながっているのです。そのあらわれの1つが、本学でホームヘルパーの養成講座を企画したときの関係者の反応のよさにあります。

依田町長さんも、町田町社会福祉協議会長さんも、両宮事務局長さんも、町のためになることだからと前向きに受けとめられ、補助金も用意してくださいました。開講式などの節目には来賓としてご挨拶もしてくださいます。

このホームヘルパー講座を修了された方々がつどいあって、ボランティアグループ「しだ会」を結成して地域のなかで多彩な活動を展開しております。この会の会長である望月寛さんは、このほど推されて町会議員になられました。福祉議員としてがんばる、とはりきっています。身延山大学において学んだことを誇りに思っている、とも語っておられます。大学図書館読書ボランティアグループマーヤの会の学生達が身延まつりに協力、バザーや大型紙芝居をおこない収益を町に寄付した際、町長さんが自ら感謝状を手渡してくださいました。このように、地域との福祉的つながりがつよく豊かに形成されているのです。

この地域から今度身延山大学では福祉コースをおくらしい、といううわさ話が広がりはじめています。なんのアピールをもしていないのに、このうごきです。本学への地域の信頼感がひろがり、深まっていることのしるしともいえましょう。

(5) 少人数教育の利

なによりの特長としてあげられるのは、1学科20名という少人数の教育であることです。全国一の少人数の大学でしょう。採算を考える法人では取り組みえない規模であります。仏教をひろめる後継者を育成する、という大きな目標をもつ大学であるからして許される教育環境であります。この使命を認識し、この役割の大きさを大事にして、教育に当たることが求められるのであります。

その具体的取り組みとしては、個の尊重であると考えられます。1人1人の学生の持っている可能性を見出し、それを育てる。そして卒業のあかつきには、社会に出て仏教のありがたさを身をもって示せる有用な人材をおくりだすことです。

新学科は、このうえに福祉につよい人材を育てることがプラスされるものであると考えます。仏教と福祉に豊かな教養を持ち、人間相手の役割に価値をみつけて行動できる人材を育て

る、という表現もできましょう。

実際に入学してくる学生は、決して才能あふれる優秀な人材だけとは限らないでしょう。ここに入れる大学があったから、という認識の者もいるかもしれません。そんな学生に対しても、卒業までには仏教の意味を理解させ、先にあげた意欲をもって巣立つところまで支援していくことが大事です。そのためには徹底しての個別教育、その学生のレベルにあわせた教育指導がもとめられます。自分の目線までおりてきて助言してくれる教育者がそばにいることに気付いたとき、きっとその学生の意欲をかきたてやる気を持って学ぶ姿勢に導くことができるはずです。そのことを信じて教育にあたる時、きっと反応がある、たしかな手ごたえがでてくる、そう思います。

真剣に他人のことを案ずる、他人の世話をすることに喜びを感じる、そしてその行いが仏教の教えにつながるものであることに気がつく、そんな学生を増やしていくことです。教育にあたる側の姿勢も問われるものです。

3. 特長ある教育とは

(1) 無住寺院を視野に

『日蓮宗宗報』16年3月3月号に、現代宗教研究所久住謙是所長から「スローフードを過疎地寺院でたちあげてみませんか」の提案がなされております。都市生活に疲れた人々に、自然のなかで地元産食材を調理し、食育の実践を過疎地の無住寺院で行うことで復活をはかろう、という提言なのです。大変興味深いことです。

私はこの言葉に加えて「高齢者福祉サービスで無住寺院を活性化してみませんか」と申し上げたいのです。どの過疎地にも高齢者はおられます。若者が都会に職を求めて転居し高齢者夫婦が家を守る、という風景は山間地ほど目につきます。介護保険によるサービスのなかで民間企業の参入もにぎやかですが、これは商売になる街の中だけです。地方では、保険料は収めても利用するサービスが少ないという現実です。この過疎の地域でも、どこにも存在する寺院を拠点にする高齢者のデイサービスセンターが生まれ、地域の実情に応じたサービスが用意されれば、これは喜ばれると思うのです。

介護保険の対象者のためのサービスであれば、保険の対象事業として認められることでしょう。そして介護予防としてのほたらきが重要になります。昼間の時間を寺院につどいあい話しあいをするのもよいでしょう。共同炊事もたのしいでしょう。畑でとれた食材をもちより昼食をつくる、その一部を寝たきりだったり不自由な身で寺まで足を運べない仲間に弁当にして届ける、勿論実費はいただく、配達するのは車もありますというヤングオールド、一緒に食事をたのしんでくることもできます。こうしたニーズに応じた給食サービスは介護保険の対象にはなりません。しかし求められているものです。

こうした活動を、高齢者のアイディアで考えだし創造するならば、立派な社会貢献になります。

す。単なるひまをつぶす、遊び、という領域をこえた働きが可能です。こうした活動を育て上げ世話してあげる役割、コーディネーターの役を、社会福祉士の資格を有する僧侶がになう、というのですがどうでしょう。かつての講やゆいの仕組みを現代に生かして、寺院を生活のセンター、福祉の拠点にするのです。そうすれば、過疎地に所在する寺院に在家出身の若い僧がすすんで開拓できる、檀家が少なくとも共同生活体の中心となることで寺の経済生活も成り立つはずなのです。法事のときだけ街からお坊さんが車でやってくるというのでは、まことにさびしいのです。いつも寺から話し声がきこえお経もきかれるということがどれだけ地域を活性化することでありましょう。

こうした明確な方向が示されれば、若い人も、定年後の人も、又リストラの人、ぜひ僧侶の資格をとろう、そのうえに社会福祉士の資格もとって無住寺にいらおう、という動きにつながるのではないかと、こんな風に考えてみるのです。久住上人の提案をあわせて福祉僧の誕生をみる事ができれば、本学らしい、福祉コースの目標が明らかになるのではないのでしょうか、という提案であります。

(2) 相談相手の役目を

家族の力が弱くなり、地域での生活共同体がか細くなった今日、高齢者の孤独死がニュースにならない、日常的事件になっております。神戸の大震災のあと、行政の用意した応急仮設住宅のなかで250人もの孤独死があったと大きく報道されたのは、ついこの前のことです。孤独死は、今は東京の街のなかでも過疎の地でも珍しくないことになっています。

この高齢社会に到着した世界一の長寿国とされる日本の風景をどうしたらよいか。科学がすすみ栄養がよくなり生活文化が豊かになった結果の孤独な人間関係、隣はなにをする人かも知らずに高層住宅に住んでいる日本です。心のつながりの貧しさです。1人暮らしの不自由さを支えるきずなをなくしてしまったこの国で、安心して相談にのってもらえる隣人がいること、行政の網の目からこぼれるものをひろいあげ、暖かくつないでくれる機能がもとめられます。国の施策によるセーフティーネットが充実されなければなりませんそれを補充する地域のなかでのセーフティーネット、これは1人ひとりの努力と協力でつくられるべきでしょう。

かつて五人組とよばれ地域のなかでささえあいで生産も消費も維持できた江戸時代、その土地でとれた食材で生活できたころの豊かな心の交わり、その底には長い間日本の精神生活を支えた仏教があったのです。困ったときはお寺にいけばなんとかあったのです。時の政権からも治外法権の存在としてみとめられる、大いなる役割をはたしていたのです。今その役割を寺院がもう一度になうことができないのか、という期待にこたえる一方法は、これからの僧侶に社会福祉士又は介護福祉士の資格をもつていただいて、寺院の所在する地域住民の心配ごと相談に積極的にあずかっていただくことです。困りごとがあったら寺へ、というムードがもりあがれば、これはすばらしいことです。地域の相談役としての僧侶の養成がのぞまれます。

(3) いのちを大切にすることを

新しい福祉コースをどんな教育内容とするのが、これからの課題です。あくまで仏教学部の中の福祉コースであることをふまえていくべきでしょう。単なる資格取得の機会を提供するだけのものではなりません。

仏教福祉とするからにはどのような内容であるべきか、身延山大学ならではの特色をどうだしていくか、教職員みんなで知恵をだしあい、討論を重ね、ああこんな立派な学科ならちょっと便が悪いけど受けてみよう、若者達の心をゆりうごかすものに創りあげていくことが大事になりましょう。

福祉の現場体験を重ねてきた身から申しあげるならば、なんらかの信仰をもってお世話にあたる職員は利用者にやさしいのであります。利用者の立場になって考えて対応いたしますので評判が良い、利用者からも家族からも、という現実があります。

介護保険法誕生以後、利用者がどのサービス、どの施設に入所するかを選択することになりました。老人施設からはじまり、障害者の施設でも契約で利用できることになりました。いずれサービス提供の量が豊かになれば、病院のように選ばれることになります。病院ではウデの良い医者がいるところが人気をよぶのが現実です。福祉施設も良い職員がいるところが望ましいとされるのが目前です。良い職員とは、専門の勉強をしてきた人というより、人柄の良い親切な職員であることとなりましょう。それにはきちんと信仰をもっていることが重要な要素になる、と考えられます。特に仏教、いのちの大切さ、他人のことも自分のこととうけとめる考え方を身につけている人材はこれから大事にされるにちがいない、と思うのです。仏教の考えをきちんと修得したうえで専門技術や知識を学びとり、職場に入ってくる人、これは大いに歓迎されるにちがいないのです。これからはますますその傾向が高まるのではないだろうか、と思わされるのであります。

(4) 仏の教えを基に

特別養護老人ホーム施設長時代はたくさんの人々の老いの姿をみせていただきました。

かつて老人ホームは、孤独老人で生活が自立できない高齢者の最後のよりどころ、ついのすみかでした。今はほとんど家族がいます。いるけど一緒に住めない、一緒に住んでも昼ひとりになるから、嫁とおりがあいがあわないから、という方ばかりです。家族のなかに高齢者の居場所がなくなったのです。お金があることが1番と主婦もパート労働にいそしみ、外食産業がさかえ、24時間営業のコンビニで家庭の食生活がささえられているのです。

こうしたなかで人間の間のつながりがうすれ、親を大事にする風習も失われている、こんななかで老人ホーム待機者は増加しているという現実が生まれているようです。ですからどの高齢者もさびしい、孤独感につつまれています。この心情を理解しうけとめてくれる職員がとても大切になるのです。

その職員の適性は何でしょう。人柄もあります。高齢者と同居した体験も尊重されるものです。さらに大事なのは人間の相手が好きな人です。人の相手がたのしい、自分の学びにもなる
と前向きになって受け止める姿勢の持ち主であることなのです。

ではこうした持ち主はどこにいるか、どうも宗教が大事、なんらかの信仰をもっている人がこのやさしさをもっていることが多いのではないかとそう思うのです。単に給料のために働くというのでは、ビジネスになります。余分なことはしない、利用者の話など聞いていたら仕事がすまない、「何枚オムツをかえるかだ」となるおそれがあります。「あぁいいウンチでよかった」と喜べる人、こうした人材は単なる専門学校では育ちにくい、4年制大学である本学できちんと人間理解に必要な基礎知識、特に仏教の教養をおさめ、そのうえに実習体験のうらづけのあるたしかな専門技術を有する人材となって送りだされることになれば素晴らしいと思うのです。

残念ながら、福祉現場はいまだ3Kの状況にあります。決してきれいな仕事ではありません。骨をおしまずにそのなかでもつとめあげる、尚かつ利用者に喜ばれるサービスを提供できる人材はなかなか見つからないのです。これにこたえるには宗教、特に仏教の心をもった人材を育てようとする本学の教育は、期待にこたえうるものであるといえましょう。仏教の雰囲気のある本学でしっかり基礎教養を身につけ現場体験を重ねるなら引く手あまたの状況になることも夢ではないでしょう。先行している大学にひけをとらない福祉コースをつくりあげるには、この仏教をしっかりと身につけることが大事、それには教職員の一致した姿勢で対処する教室の内でも外でもこうした雰囲気をつくりあげ、学生が興味をもって学業にとりくむ条件整備のため支援をすることが求められます。こうした営みのなかから、本学らしい福祉コースが形を成し発展していくこととなりましょう。

4. おわりに

—コミュニティのささえてに—

日本の福祉は、遠く聖徳太子や行基のはたらきにはじまるとされます。いずれも仏教徒であります。仏の教えを実践として取り組むとき、生活に苦しみ悩む人々の中に入り、なにが助けになるかと考え行動を開始する、それが福祉の事業として世の関心と感動をよんだのでありましょう。

戦後の自由と平等の社会をめざし、力をあわせて汗を流してきた日本でした。憲法25条は輝いていました。しかし現実はずいぶん遠いところにあります。国内の所得格差は広がり、1億国民総中流といった言葉も消えています。経済的に恵まれていても、心の貧しさに苦しむ人々も多い現実があります。社会保障給付費のGDP比で、スウェーデンでは29%を超えるのに、日本は14%台とされています。国の施策の面でもっと充実させるためには国民的関心が高まることが求められています。自分は元気だからいい、困っているのは自業自得だ、と他人に対し冷たい

無関心でいる人の多い社会では良い方向には向かないでしょう。みんなが他人ごとは自分ごととうけとめ、地域社会のなかで支え合って生きる心のつながりのあるコミュニティをまずつくる、その上で及ばぬところは政治や行政の力でカバーするよう要請していくという草の根からの働きかけがないと、なかなか法律にかかっていることも実現しないのでしょうか。このすみよい地域づくりを住民の先頭に立って発展するリーダーがもともとめられています。この役目を寺院とその中心の住職に期待したい、という願いがあります。

かつて働き手を軍にとられ農業にいそむ母親のため、寺の広場で託児所を開いたのはご住職と大黒さんでした。農繁期託児所とよばれ、今日の保育所の原点です。今、超高齢社会に入っていくといわれ、人口の4人に1人は高齢者になるとされる時です。この高齢者が安心して日常の生活ができ、心身ともに豊かに家族にかこまれ、なれ親しんだ地域社会で生きつづけられるようになること、これが大きな目標です。『長生きして良かった』といえる社会づくりです。これが福祉の大きな課題です。このために、日本のあちらこちらで具体的なとりくみがなされることが大事であります。国の福祉施策を良い方向にもっていくためにも必要なことです。この流れをすすめるきっかけになると期待されているのが、地域福祉計画を住民主体でつくろうというごきです。行政主体ではなく、地域に住んでいる住民がわがまちを住みよくするためにどうしたらよいかを具体的に考え、計画をたて実践していくことです。この計画が着実にすすむところはすみよくなる、他人まかせ、行政まかせのところはおくれていく、ということになるのです。

この住民のなかでリーダーとなり良いはたらきをしてほしいと期待するのが、福祉のことに理解のある僧侶の方です。地域で信頼のあつい僧侶の方がうごけば、住民も動き行政も動くはずです。コミュニティケアという分野をになっていただける僧侶の養成を、という願いも先にあげたいいくつかの期待に加えたいのであります。住民個々の相談相手になっていただくとともに、地域をうごかし生活を豊かにするネットワークをつくるお役目をもになっていただきたい。そのためには、社会福祉士などの資格をとらないにしても、新学科に用意される福祉部門の科目をも僧道教育の科目に加えてとっていただければありがたい。そうして“福祉に強いお坊さん”になっていただきたい。きっと檀家の方々にも喜んでもらえるはずである。こんな夢をえがいています。

大学全体の中で、仏教と福祉をつないだ教育がひろがり深まることを願いたいのです。専門分野が違って、根底の考え方のところでは共通のものをもって教育にあたる、という教員側の姿勢ももめられましょう。幸い先にあげたようなたくさんの利点をもっている本学です。本学の建学の精神にもかなう教育が、この福祉コース新設の動きの中で勢いをえて展開されることを心から願うものです。